

2019
秀作

第17回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

私が期待する介護用品業界

広島県・広島県立広島特別支援学校高等部 3年 永井 光樹

私は、左半身に障害があります。足に関しては、数回に分けて手術をしなければならず、手術後は、装具という物をつけています。装具とは、身体の一部を外部から支え、運動能力の向上や痛みの軽減を図る補助具のことです。

そのため、装具をつけている左足だけが大きいサイズになってしまい、左右同じサイズの靴をはくことができません。装具をつけて、幼稚園や小学校に通っていた時には、サイズ違いで同じデザインの靴を1足ずつ購入し、片方ずつはいていました。

ただ、サイズ違いの靴を購入するのは簡単なことのようにですが、装具をつけている足にはける靴というのは、開口部の広いものでないといけません。また、キッズサイズとジュニアサイズの合間の頃には、同じデザインを見つけること自体が大変で、色だけを合わせることもできない時もありました。

2足購入しても、1足分はムダになってしまい、経済的にも家庭の負担になっていたと思います。余った靴もサイズが違うので、他の人にあげることもできません。使っていないものを処分することには、抵抗があり、申し訳ない気持ちになりました。

ちょうど1年前の2018年8月、左足の手術をしました。1年が経ちましたが、現在も装具をつけています。

幼稚園や小学校の時とは違い、高校3年生なので、進路先などを訪問することもあるからという両親の配慮から、今回は、装具を作っている会社に靴を注文することにしました。その会社の方に、入院している病院まで来ていただき、採寸から現物の試着までさせてもらいました。そして、サイズが左右それぞれ違う靴を1足としてそろえてもらう、セミオーダーという形で購入しました。

その靴を購入した後も、今後のことが気になりました。インターネットで調べてみるとサイズの違う靴が販売されていることを知りました。でも、実際に

試したりはできません。前述したように、開口部の状態などは、実際の商品を見て、試してみなければわかりません。

さらに調べてみると、介護用品を販売しているお店で、同じような商品を購入できることを知りました。高齢者のための商品のようにでしたが、私にも適した商品のように感じました。見て買うことのできる実店舗があるというのは、大変助かると感じました。

私は、左手も不自由なので、制服のワイシャツのボタンを、自分で留めることができません。母は、私のために市販のワイシャツのボタンをスナップのボタンにつけかえてくれています。しかし、スナップボタンにつけかえる作業は大変な手間がかかるそうです。

また、私の祖父も高齢で、手が震えるので、ワイシャツを着るときは、母に手伝ってもらっています。

私が現在必要だと感じているものは、多くの高齢者も同じように感じているのでは、と思いました。

「高齢化社会」「高齢社会」「超高齢社会」という言葉があります。これらは、高齢化の進行度を示す言葉です。65歳以上の人口が、全人口の7パーセントを超えると「高齢化社会」、14パーセントを超えると「高齢社会」、21パーセントを超えると「超高齢社会」、とされています。

日本の高齢化率は急激に上がり、1994年に「高齢社会」、2007年に「超高齢社会」となりました¹⁾。

これほどの速さで進行している国は、世界でもほとんどなく、高齢化率が高い国としてよく挙げられる、スウェーデン、ドイツ、イギリス、フランスなどよりも日本の高齢化率は高いということです。

先ほど挙げた、スウェーデン、ドイツ、イギリス、フランスなどの諸外国のノウハウや商品を、日本人に合ったものを開発し直すことなど、この分野はまだまだ可能性に満ちていると思います。

「今後、高齢化が進み、総人口の半分以上を占めるようになる」とニュースで聞いたことがあります。これからは、介護用品を取り扱うお店がたくさん増えてくることでしょう。

介護用品系のお店が増えてくると、介護用品の種類や製造する企業も増えて

くると思います。そうすると、価格競争が起き、より良い物が安く手に入るようになることが期待できます。

人はみんな、老いていきます。その時に、素晴らしい商品を安く購入することができれば、家計のやりくりが、少しは楽になるかもしれません。

最後に、介護用品には、私のような障害者^{がい}にも使えるような物も多くあるので、もっとこの業界が発達・発展してくれれば良いと思います。

(注)

1) 『最新現代社会 新訂版』(第2部第3第2章 11 社会保障制度の課題) 実教出版

